

標 題	宍道湖西岸地区大区画ほ場整備により「小豆」の産地化を目指す！その4 ～ 小豆の実証ほ2年間の成果と今後解決すべき課題等を整理 ～
-----	---

(ダイジェスト)

宍道湖西岸地区大区画ほ場整備後における高収益作物として約140haの産地化を目指す小豆については、同地区農村整備推進協議会（多久和修一会長）と出雲農業普及部等関係機関が、産学官連携し、平成28年から省力機械化体系技術、湿害軽減対策、品種比較を実証してきました。この度、その成果及び課題等がまとまりましたので、以下により報告します。

当地区で出雲産小豆を大規模に生産しブランド化するためには、省力機械化生産をすすめ湿害をはじめとする安定多収栽培技術の確立はもとより、複数品種による作業分散体系の確立が喫緊の課題です。そこで、平成28～29年はコンバイン収穫による省力機械化体系技術、29年は一発耕起播種機（トリプルエコロジー）による湿害軽減対策試験と品種比較試験（丹波大納言・岩手大納言）を実施しました。その結果は、以下のとおりです（「平成29年度全国農業システム化研究会 現地実証調査成績書」一般社団法人全国農業改良普及支援協会出版のP181に掲載）。

- 1 省力機械化体系技術
 - ・狭条密植栽培によりコンバイン収穫による省力機械化体系が概ね確立できた。
- 2 湿害軽減対策
 - ・一発耕起播種機（トリプルエコロジー）による表面排水とほ場の2割を占める明きよの設置により湿害が軽減でき、目標とする収量120kg/10a及び所得60千円/10aを達成した。
 - ・今後は、播種2か月以内の多雨に耐えうる技術か否かの継続検討が必要である。
- 3 品種比較試験
 - ・慣行栽培の丹波大納言に比べて岩手大納言は、1週間程度収穫期の前進化が図られたものの収量が3割程度低い上に安価な中粒規格となり所得が4割程度低いなどの課題がある。
 - ・今後は、中粒の品種について超密植栽培等による多収技術の検討をすすめるとともに大粒で多収、早期収穫ができる島根県オリジナル品種の開発が必要である。
- 4 雑草対策（新たな課題）
 - ・カヤツリグサやタデの雑草が繁茂し、大きな課題となった。
 - ・今後は、茎葉処理剤の畝間散布の実証を行うとともに、大豆等で使用する後期除草剤の登録等を農薬メーカーへ要望していく。

今後も、出雲ぜんざい学会、出雲菓子協会、島根大学等産学官の連携により、出雲産小豆のブランド化に向けて、積極的に取り組んでいきたいと考えています。



播種機（トリプルエコロジー）

汎用コンバイン

丹波大納言（左）と岩手大納言（右）